

有金銀の事も多し
しるし我々も御座り
あらば接ねる事あり
此言も御座り候
今又御座り候
しるし我々も御座り
あらば接ねる事あり
此言も御座り候
今又御座り候

年号居

大隈伯御会

其の事

今更に御座り候事
甲申の事しるし
今更に御座り候事

中台百有年
大高木更事

十一日

千箱田

仙骨大隈定信殿
立物展



天下無雙



▲大浦鐵武 本日未迄に郷里鹿島から歸京するやうだ
▲渡邊洪基 菅原の傳坊を従へ函館へ行きやつた
▲大森内務事務局長 昨日歸京
▲松原英太郎 明日出發野里岡山に往くらう事だ
▲平田東助 返子の別荘で沙風に吹かれても風を召した
▲安樂警視總監 明日管内各警察署長及監獄署を巡視する
▲星郵便大臣 兼てお觸の通り昨日作業局及新橋工場を
▲藤昌誠 遊邊洪基のケツ追つかけて函館にいつた
▲西原清東 足尾鐵山へ鐵毒觀察に出掛けた

紀州徳川の獸行(八)

抑も徳川茂承が、身は荷も名門の後を継ぎ殊に華族として、四民の尊敬を享くべき地位に在りながら、市井の素町人さへ容易に敢てすることをば望み、高利貸付營業を内職として、我身の榮華を誇るのみにて、人の慶否は顧みぬと云ふ、世にも恐るべき鬼畜の群に這入つたはれ因縁はと云ふと、開は遠く明治五六年の交に在ることじや、所が、此茂承と云へるは、固より根が暗愚の贅物なれば、口から進んで出る思はしき營業を思立つべき譯はなかつたれど、暗君の下には必ず傍臣あるは古今の習で、現に茂承が左右には、太政官出頭一件から、四國通より流込んだて、なし兒の安の字(三浦安がこと同後姓名を併せ記すは勿体なきを以て必ず安の字を号記す)が付纏ひ、遂には茂承も、安の字が口車に乗せられ、人生の外の畜生道に乗出した。此は全く茂承が、暗愚の悲しさ、目を見えざる馬鹿慾を起したからであるのじや。

明治維新の際には、世人も知れる通り、新政府は、倒幕の功名をこぞ立てたれ、財政の一條に至つては、非常の困難を窮め、堂々たる太政官も、僅に三千兩の金子を持つて居た式で、何事にも殖む手を出し兼ねた有様であつたので、當局者は、様々に苦心して、様々の方法を盡して、財政を維持し達せんとしたが、中にも**太政官札**を發行して、明治十三年を期限に、諸大名其他民間の富豪より、金銀を吸收した事があつた。が、當時紀州の徳川家も、祖先傳来の金銀を政府に納れて、太政官札を下渡されて居たが、明治五六年の交には、紀州家にては、此**太政官札**を十萬兩を所持して居つた。此有様を見て取つた安の字は、奇貨失ふ可からずと打税んで、此札を民間に貸付け、大に自己が私利を圖らうと考へた。此安の字は、徳律にも、太政官六等出仕として月に百五十兩を預かる身の上と成つて居たので、四圍ののさばり宛として、井上、木下、立身出世であるのは尙ほ、根の素性、下主の腹に宿つたる儲道者のど、自然非義の財貨を貪らば立往かざる有様、陥つて居つたものじやから、かたんに以て、若千度、鐵毒無毒に傍觀諷刺を并べ立て、我頭茂承、道ならぬ道に引込み、右十萬兩の太政官札を資本に**高利貸**

付營業を紀州家の内職とすることゝなつた。但し、安の字も、始の内は、此高利を以て獨り自分が強慾をのみ充すべき等であつたが、茂承を引込むに勢、遂に利を以て啖はさなけりやならなくなつたので、イツとなしに、茂承にも高利を分配すると云ふ習慣となり、又此習慣に旨味を喰ひ出した暗愚の**茂承**は全く馬鹿が色氣を知つたのと同様に、時を嫌はず、其所を厭はず、高利の徳に浴するを以て**無上の快樂**と心得る様に相成つて、因襲久うして、今日迄、殆ど**三十年間**暴横非道の貸付を爲して義理人情を忘れ果ては高利貸を以て、尙ほ是れりせせず、更に進で、高利貸付を許借行爲の手段として、今日にては公然人の**財物**を**詐奪**して飽ちない云ふ有様じや。そうして、始めて高利貸付營業を實行するに、追に東京にては愧づる所があつたと思へて、先づ以て檣濱に持出したので、ソコデ第一着に、此暴君佞臣の毒爪に罹つて非常の刻苦に泣いた者は、前に云つた**岡本信行**それから又、今の高島嘉右衛門の親族で、當時**高島屋平兵衛**と云つた男じや。が、此は共に儲蓄者で、現に向は存在して居るから、茂承一類の非道暴逆は、到底暴露せでは居ない譯じや。

反響 紀州徳川大の反響
◎茂承が墮落は先天的、徳川打撃社會の爲に快絶と存候然るに茲に一言申上度事は茂承爲行を働か候事は決して今日に始り候譯には無之實に彼は先天的の墮落漢かと存せられ候全株茂承が實父は西條藩の舊藩主にて性分遊藝を好み尺八を弄太杯言語道斷從つて嗜溺放逸其身を倚めず江戸話の折なきには動樂殊に甚しき爲に今頼兼と云ふ評判御座候品川宿上殿相模のメシ盛り女郎の小梅と云ふ通ひ詰り馬鹿な浮名を相立候程の阿呆者に有之候へば現る阿呆者の家庭に生れたる茂承亦西より畜養獸行の馬鹿者に候はん事尋常先天的かどを候御一筆迄に如此候草々(遺儀博士)

◎娘の身の上は無事に候哉 (新屋) 徳川家の紀事一見致驚入候拙者娘事同邸に有候見習の爲に差遣し居候無事に候哉乍御迷戀御探訪被下候は、一生の御厚恩に御座候御行なせ娘の身の上は働かれては誠に取返しが付かず候儀に付き晝夜心配致居候右御願申上候恐惶謹言(千葉在の一人)

話者云入申越の越き希望に任せ候間娘子の名前相認相認め更に申出で有之度全株紀州徳川杯に行儀見做ひとは飛た郎達に付き至急引取るを尋ね親として之の義務なり娘子の無事か否かは獸行紀事の進行に依つて明白す可けれど尙ほ探訪の上報告す可し先は遊事迄



受、矢も、めたが、本信行、に同人、の趣き、から、右開拓、所じや、たので、承及安、者とし、の體を、營業組、岡本、債主、し、調、の、に及ん、に、物品、我輩、が惡肉、じや。

社會の、承が實、承が大、國に通、と相窺、を携え、以居候、笑止千、へは尙、(浪人)、社に明、つて目、らそれ、二浦の、れ候を、意氣を、クにア、そこで、決して、校にも、黒髮首、向も無、手日々、日、夜、百を請、存候へ、近々の、肛の筆、れど我、兄の自、ふ者は

倫敦電報に依れば英國官報に掲載せるデズ
と將軍の報告に於ける勝利は全く
日本軍の功勞に出づと説き日本軍は極めて
敢勇に奮闘し連日の敵の防禦を破りたりと
云ふて在つた。

(頁四號每紙本)

天下無雙



進化する件等に付決議したが其中重なる
項は次の如しとす。

- 一、東京市街街道株式第一回抽(株)の
き金拾貳萬五拾圓)最終の期日を明治三
十四年八月八日と決定
- 一、技術部は於て立案したる達成線八四十
哩を第一期終結とし直に竣工に關する設
計を創立委員に於て速に進行すること

▲板垣 目下アバイがわくわくしてひこである
▲池田 池田部長 一昨日、東京で薩摩杉村方に對面を取
▲松尾 松尾造船大監 昨、紀州に向ひ立ち妻君血の涙
▲田口 田口警部 本日、紀州の國民會館に於て演説をやる
▲細川 細川警備司令 昨日、宮三省へ歸り出る
▲花房 花房統計局長 新潟へ出張せよと命ぜらる
▲内村 内村送電局長 昨日、任地にいつた
▲千家 千家府事 昨日、宮内省に幸り田中宮相と面談
▲林 林農務局長 松元秘書官を從へて九州へ
▲船橋 船橋昨日、西那須地方へ遊獵のお楽しみ
▲三井 三井三郎助 昨日、門司よりカエる

紀州徳川の獸行 (九)

高利貸付の手始め 茂承の接近
物品詐奪の第一段 信行の接近

前回は云つた様ナ次第で、紀州の徳川家は、
淺間しくも茲に太政官札十萬兩を資本とし
て、高利貸付營業を内職に不義の富貴を貪
ると、なつたが、當主は茂承は、慾にこそ
迷ひたれ、實は暗愚の贅物じやで、自から
此營業に従事するとば勿論出来ぬ話であ
る。又其上に惡顧問毒爪牙の三浦の
安の字と雖も、奸佞邪智には長けた
れど、高利貸付、暴利吸取の方法に至つて
は、マダしろろの事なれば、ツマリ西

條藩の町人にて何某と云へる

が當時東京に在つて、高利貸を営みつ
あるを幸て、眞手を求むて、之をば、
家産高利貸利吸取の一昧に引ッ込ん
が、此高利貸は、豫て岡本信行とは知り合
いの間柄であつたので、又當時、岡本が横
濱開拓事業の爲に、既に幾多の負債に苦み、
尙ほ更に事業資本を得るが爲に、甚だ焦慮
しつゝあつたのを承知して居つたのが縁由
と成り遂に、此高利貸何某、周旋に依つて、
岡本は紀州家の金子を借用して、果ては一
貧今日の窮地に洗滌さるゝゝなつたので
ある。

徳川家の鬼畜

と恐る可き
卒共の甘言にたらし込まれたのが、遂には
身の詰りとなり、多年苦心の事業も、泡沫
夢幻に歸し去つたばかりか、家をも倉も失
ひ去つて、窮途に血涙を呑まねばならぬ時
宜と成つたのじや。

茂承の馬鹿慾

に、
紀州家の郎黨共や、右の高利貸の何某なん
ど、共に強慾の集合なれば、既
に太政官札十萬兩を資本に、高利貸付營業

を内職にすること、一決してからは、矢も
楯もたすらぬ、イ、獲物もがなと待受け、
遂には手を出して、獲物の搜索を始め、
右の高利貸何某の注進に、横濱の岡本信行
と云ふ者が、借金を望み居る由、并に同人
は、横濱に山ナ開拓地を所有し居る趣き、
夫から、右開拓地を抵當にするも苦からぬ
と云ふ境遇に居る様子、其上に又、右開拓
地は後求必ず非常の價格を有すべき所じや
と云ふ見込あると等、遂に聴取つたので、
开は幸と云ふ調子で、茲に始めて茂承及安
の字等は、右の高利貸何某を問はし者とし
て岡本に近づかせ、詰り岡本は親切の体
を見せ掛け一には、紀州徳川高利貸營業組
の一味たる様子を深く隠散して、皆く岡本
を籠絡し、又他の一面には、岡本の債主に
手を回し、岡本が資力日々に減損し、開
拓事業は、底望なきものであることを、
論じて、更々煽動して、岡本に急劇の催促
をなさしむると云ふ奇々怪々の舉動に及ん
た。が、此事遂に如何になり往きしか、蓋
し此一條が、即ち徳川茂承暴利吸取物品詐
奪の第一階段である。一階段二階段、我輩
は、段を追ふて、筆尖直に茂承一類が惡肉
を刺し、臭骨を刺すまでは已まない筈じや。

反響 紀州大反響

◎茂承がヤケ淫樂 貴社の華族征伐社會の
爲に賀慶不斜就ては昨紙には徳川茂承が實
父の放埒投書有之一讀仕候處實に茂承が獸
行淵源あることと感心仕候茂承は貴社の大
打撃に避易致候ものか近來當地高麗園に通
込居候依つて謹慎にても致居候事かと相窺
候處何が扱て東京より廿七八の妖婦を携へ
來つて日夜言語に斷ねたる舉動に及び居候
何れは茂承ヤケの淫樂かと思はれ笑止千
万に候右妖婦は東京者に相違無之候へば尙
は貴社の精探を望み居り候敬具(大磯浪人)

新日本子云ふ右妖婦の索性逐一我社に明
白して居る依つて記事の進行に従つて自
然スツバ抜くこととなる筈じやからそれ
迄辛抱して待つたら宜かるは

◎安の字不安のぢいかに變ず 拜啓三浦の
安は貴社が不時の災厄にて休刊なされ候を
幸に種々なる廣言を吐きアノ社は生意氣に
僕ノ事を彼是と惡口したから僕はスグにア
ノ社の金主の頭を抑へてやつたからそこで
金主に大喝され到頭廢刊したのじや決して
休刊じやない再び「新日本」が出たら役にも
立つまいが乃公が白塚染で染めた此黒髮首
を進上しようど毒付き居候處貴社は間も無
く捲土重來の勢を示され打撃の火の手日々
猛烈を加へ候爲に三浦は呆氣に取られ日夜
憂慮殆ど膽玉を冷却致居候但し安の首を請
求する者のない丈は安殿も安心かと存候へ
ど紀州家追放の身と成ることは何れ近々の
中と存じ候惡人亡びて善人榮ゆる貴社の筆
尖の大徳めでたかしこ(麻布生)

新日本子云ふ文中金主云々の語あれど我
社は少壯氣鋭獨立獨歩新日本眞男兒の自
働自營に成つて居る別に金主と云ふ者は
無いのじや念の爲に一言する